

ノルウェーの保育／幼児教育

名古屋大学大学院生 伊藤 喬 治

1. ノルウェーの幼稚園と「レッジョ・エミリア」

ノルウェーの幼稚園（ノルウェーでは、保育／幼児教育を行う施設のことをすべて、「子どもの庭」(kindergarten)に相当するノルウェー語である“barnehagen”と呼んでいる）は、現在強い「レッジョ・エミリア」の影響下にある、とノルウェーの保育／幼児教育研究者、幼稚園の教員、スタッフは口を揃えていた。「レッジョ・エミリア」教育法に対して、芸術教育（創作活動）の重視や、各種ドキュメンテーション、そしてプロジェクト式の教育方法である、という認識しか持ち得なかった浅学な筆者は、彼らの「レッジョ・エミリアの強い影響」という言葉から、少し硬直した教育活動を予想してしまっていたが、実践を見たことでこの認識は鮮やかに裏切られることとなった。

その前に、まず、ノルウェーやスウェーデンといったスカンジナビアの国の近年の保育／幼児教育の動向を確認しておきたい。従来まで社会保健省や子ども・家族省の管轄であった保育／幼児教育活動は、最近では義務教育などを担当する教育省の管轄になりつつある。またフィンランドにおいては、保育／幼児教育活動は社会保健省の管轄であるものの、研究の場においては、「保育」(daycare)を表す「päivähoito」

という言葉に代わって、「幼児期の教育」(early childhood education) を表す「varhaiskasvatus」という言葉が使われ出している。

このような変化は、社会サービスとしての保育活動の提供が充足されるようになり、その次の段階として、就学前教育と義務教育の連携の問題や、人的スタッフ養成など、質の向上を目指していく中で生まれてきた概念であるとされる。さらに、特にノルウェーやスウェーデンにおいては、OECDのPISA調査で、フィンランドに差をつけられたことも、それまでの「ただ面倒を見ていればよかった」保育／幼児教育活動に、質的な向上を求めるきっかけになったとされる。一方、具体的な内容としては、筆者が昨年スウェーデンの一般的な幼稚園を訪問した際に、各子どもに個人ファイルを用意し、子どもの絵や日々の活動の写真、そのときの会話などのポートフォリオを、最近のスウェーデン中の多くの幼稚園が行っていることを聞いた。また、これが「レッジョ・エミリアの影響」であるとこの幼稚園のスタッフは付け足していた。

話を戻すと、このようなイメージを持った状態で「レッジョ・エミリアの強い影響」と聞き、筆者はつい、ドキュメンテーションに加えて、グループによるプロジェクト

活動や創作活動を集団学習で行っている姿を想像してしまった。

しかし、その予想は、前述のとおり、鮮やかに裏切られた。一言で言ってしまうと、ノルウェーの日々の保育内容そのものは、日本と比較して特に大きな違いはないように感じられた。子どもごとに大量のポートフォリオが作られ、また工作では5歳児であってもナイフを使わせているという細かい違いはあるものの、根幹には遊びを中心とした自由保育ががあり、またそのなかで子ども同士の間関係が構築され、言葉と身体能力が育成され、さらに各種の創作活動が含まれているという点では、日本とあまり変わらないものであると言える。

ただ、ノルウェーの幼稚園関係者は、保育／幼児教育活動を行う中で、保育内容だけでなく、幼稚園のとある点にも非常に注目していた。それこそが彼らが「レッジョ・エミリアの影響」と呼んでいるものの一つで、「幼稚園の部屋」への注目のことであった。ここでいう「幼稚園の部屋」とは、机、椅子、おもちゃ、壁の色、カーテンの素材、照明、自然など、幼稚園の存在する施設・設備などの物理的な環境のことをさす。

2. 「幼稚園の部屋」という教育方法

上記のような「幼稚園の部屋」研究のきっかけとなったものが、エリ・ソルベルグセン（Eli Thorbergsen）による、『幼稚園の部屋 新しい可能性』（Barnehagens rom-nye muligheter）と題された研究である。以下に、なぜ「幼稚園の部屋」に注目する必要があるのか述べられている部分を本書から引用する。

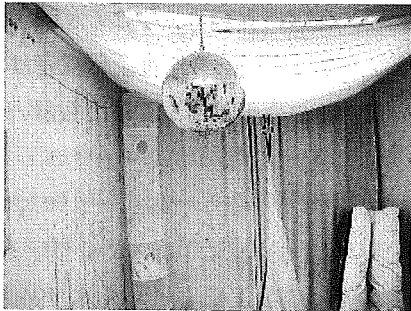
「幼稚園の職員たちは、幼稚園の物理的な環境がうまく作用していないことに頭を悩ませている。（中略）今までノルウェーの幼稚園の部屋はほとんど、その物理的な環境に重点を置いてこなかった。（中略）現在に至るまで、幼稚園の設計に関する様々な議論は、しばしば学問的な教育編成よりも、そのスタイルや目的について論じられてきた。それに加え、その主要な関心事は、たびたび不安定になる経済や、おそらく変革に反対するであろう事業主などについてである。幼稚園が建てられるとき、そこで働く幼稚園の教師たちは、それにはほとんど関わりをもっていない。小規模幼稚園のようなところが雇う建築家は、教育的なアイデアを用いることなく部屋の割付けを行っている。職員が一団となり、教育的な活動を促進させるのは、部屋の設計の後のことである。しかし、教育の空間を設計することは、学問の一分野であり、そしてより良い解決に向けて、保育者たちの手助けをする必要がある。」

そして本書では、「幼稚園の部屋」のつくり、色、素材、感触、インテリア、これらあらゆるものが子どもの行動や発達と関連していることを指摘する。五感を意識させる事で子どもの健全な発達を保障するとし、積極的な「幼稚園の部屋」の利用について提案する。

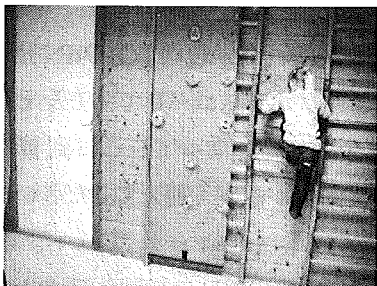
例えば、1歳前後の子どものための刺激のある部屋には、固有の意味を持たず、しかし部屋に関連付けられた、感覚的に柔らかい素材で部屋を構成することが求められる。たとえば、メッシュのカーテンを張り巡らし、光が透けること、反対側が透けて

見えること、風で揺れること、手で持って動かせること、そして自在に形が変わること、自分より大きいことで、子どもは安心感を得つつ、また積極的にそれに触るなど関わり、その反応を受けることもできる。

また、昼寝のための部屋も同じように、メッシュのカーテンなどやわらかい素材が部屋の壁を覆い、やわらかい雰囲気を出すことが求められる。さらに照明は常に薄暗く調節され、また彩度のない家具や布を用いることで、精神が落ち着き、安らぎが与えられ、自然に昼寝に入ることできるようになる。



さらに、冬の積雪時でも運動ができるよう、室内に運梯、ロック・クライミング、はしご、バランス運動のためのアスレチックなど、肢体の運動のための設備が用意される。



また、部屋の中には、文字が貼られ、階段には段ごとに数字が書かれるなど、感覚的に文字や数字を学ぶ事ができるよう構成

される。しかし、これらは子どもを混乱させないため、あくまで簡潔さと秩序とともにデザインされる。

このようにノルウェーでは、幼稚園は「レッジョ・エミリアの影響」として、芸術教育、ドキュメンテーションとともに、「幼稚園の部屋」の最適化の概念を導入し、子どもの発達の段階にあわせた最適な物理的な環境づくりに注目している点が特徴的であった。

3. ノルウェーの幼稚園と研究との関係

このような「幼稚園の部屋」への注目は、ノルウェー全体の中で、非常に大きなものになっていると聞いた。では、なぜノルウェーではそこまで一斉にレッジョ・エミリアの影響を受ける事になったのか、またそれが可能であったのか。ここではこのことについて述べたい。

まず、幼稚園の職員体系として、各幼稚園の園長は、公立の幼稚園であっても対外的な顔、経営者としての立場であり、他の教員を指導する存在としての立場ではあまりない、という点が挙げられる。そのため日本的な「園長先生」、つまり豊富な経験と十分な知識に裏付けられた幼稚園の教員たちをまとめる教育的指導者が園におらず、一部に質がひどく低下していた幼稚園があったり、また伝統的な教育方法が世代間で伝承されにくいという問題もある。しかし、それは一方で、幼稚園の教員はそれぞれの教育方法に関して、比較的自由に実践できるという特徴をうみだしている。

また、現在のノルウェーでは、幼稚園の教員は一人ひとりが同時に研究者でなくて

はならないとされ、後述するが各幼稚園の研究機関との連携も強い。

このようにして各教員が新しい教育方法に関心を持ちうる機会と、実践できる状況にあったことで、レツジョ・エミリアの教育方法がノルウェーに紹介された時、多くの教員がそれを実際に導入することができたといえる。

ただ、ノルウェーの場合、それと同時に、またそれ以上に興味深かったのは、研究と実践が密接に関連している現在の状況である。ノルウェーでは、教育学は理論研究というよりも、理論を持つ実践研究として扱われているようで、研究内容は実践に活かされてこそである、と考えられており、多くの幼稚園に研究者が出入りし、また幼稚園の教員も研究者と連携し、お互いに保育

／幼児教育の質の向上のために協力しあっていた。

突然まったく新しい教育方法を取り入れることは、経験により蓄積されてきたノウハウを無視し、また結果としてよくない方向へ転がってしまう可能性も否定できない。しかし、それでもなお、新しいアイデアを積極的に検討し、導入し、実践を行い、それを再び研究の場にフィードバックし、改良して新たに実践する、それが一部の実験園だけではなく一般の公立幼稚園でも普通に行われている点が、ノルウェーの幼稚園のもっとも興味深い点であった。「理論と研究は、実際に実践されてこそ意味を持つ」とノルウェーのある幼稚園研究者は言っていた。その言葉は、あまりにも重いだろう。